INFORMATION

寺子屋トーク

快楽を生きるための 哲学クリニック（仮題）

第28回の寺子屋トークは、6月16日に決定。ゲストに宗教学者・植島啓司さんと哲学者・鷲田清一さんをお迎えします。

終身雇用制の崩壊や家族形態の多様化など、「絶対」というものがなくなりつつある今、「お手本」や「目標」が見つからず、不安になっている人が増えているように思います。でも、ここで改めて、「お手本」や「目標」が必要なのか、「絶対」というものがあるのかどうか、考えてみませんか？

ゲスト2人のお話は「目からウロコ」まちがいなし！　ただし過激すぎるかも知れないので、「まゆつば」半分でお聞き下さいね。薬になるか毒になるかは、あなた次第。

詳細については、同封の仮チラシをご覧ください。

◆　◆

○日　時／6月16日（土）　13時30分開始（16時終了予定）
○会　費／会員・学生1000円（一般1500円）

いのちと出会う会

生きること、老いること、病すること、そして死についてじっくり仲間と語り合う、そんな集いが「いのちと出会う会」です。

毎月第3木曜に開催しています。どなたでも参加できます。ぜひあなたもいらしてください。

第9回　5月17日（木）
「わが家で死にたい・家族と看取り」

話題提供者
田辺病院看護婦・僧侶
中村敏さん

◎時　間：午後6時30分～
◎参加費：500円
◎会　場：應典院
お申し込みは事務局まで。

交流事業 夜桜の下で美酒に酔う

今年度最後の交流事業、恒例の夜桜会が、4月6日に開催されました。

春の陽気にめぐまれた絶好の花見日和に、中年男性を中心に23名の方が参加、ライトアップされた桜の下で和やかなひとときを過ごしました。

閉会間際には、当日應典院の観劇帰りのお客さんも交えて、記念写真となりました。



総会は6月27日に開催!!

会員総会は、6月27日（水）の午後7時からの開会を予定しています。

4、5ページでもご紹介の通り、現在理事会では組織などの改革に向けて、話し合われています。今回の総会でも、会則の変更を始め、新たな方針について、確認をしていきたいと思いますので、ぜひ多くの会員のみなさんのご参加をお待ちしています。

なお、詳しいご案内は、あらためてお送りします。

●

○日時
6月27日（水）
19時開会（予定）
○場所
應典院

【新入会員ご紹介】

（2001年4月20日まで）

前号発行以降にご入会いただいた方々です。ありがとうございました。

○一般会員
【大阪府】
大屋　公彦　枚方市
畠中　章雄　大阪市東淀川区
【岡山県】
長島　洋　赤磐郡
【福岡県】
堤　孝雄　久留米市

サリュ VOL. 25
應典院寺町倶楽部のニューズレター

発行日　2001年4月20日（偶数月発行）
編集人　池野亮、大塚郁子、川井田祥子
発行所　應典院寺町倶楽部
〒543－0076
大阪市天王寺区下寺町1－1－27
TEL06－6771－7641
FAX06－6770－3147

應典院寺町倶楽部のニューズレター

Salut

［サリュ］
フランス語で救いの意

2001 APRIL
vol.25



やわらかな風がここちよい帰り道。冬には寒さに早足で歩いた道も、春のうららかさはちょっとした散歩気分にさせてくれます。風に誘われるまま少し寄り道、初めて抜ける通りに、それはみごとな桜が満開でしばしうっとり。「ぶらぶら歩き」しなければ知ることもなかった桜の樹。思わぬ発見に出くわすのが寄り道のよいところです。最短距離を選ぶことも大切ですが、目標に向かう一本道より、たくさんの寄り道を経るほうが人生も豊かになるのかもしれませんね。

「いのち」がふれあう場の創造
～2000年度寺子屋トークをふりかえって～

寺町倶楽部のメイン事業のひとつ寺子屋トークも回を重ね、今年2月の「新世紀・アーツ解体新書」で27回を数えました。「こころ」をテーマに、様々な分野で活躍されているゲストを招いて、宗教、福祉、教育など多様な内容で、今年度は計6回の企画を行いました。
今年度は延べ354名が参加、多士済々なゲストが語る「いのちの現場」からの報告が、多くの感動を呼びました。

「こころの文化」とは?

気づき・学び・遊びの3つをキーワードに、主催事業を展開する中、寺子屋トークは学びの場、「こころの文化」の探求をテーマに回を重ねてきました。

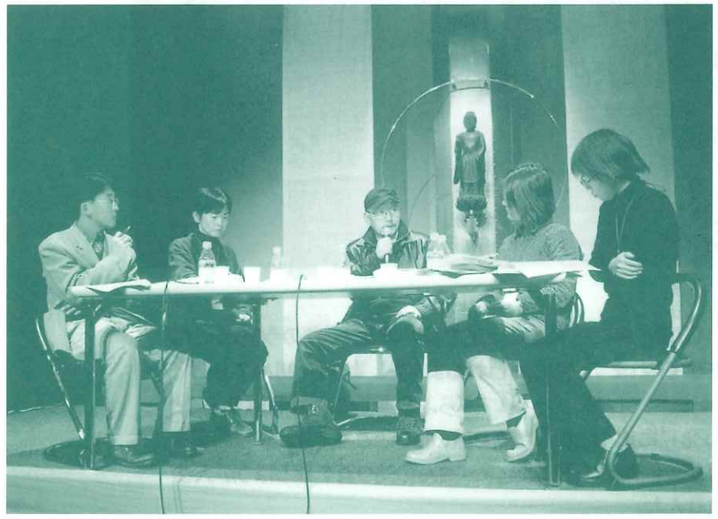
当初、「こころの文化とは何か」ということで試行錯誤していましたが、いのちを感じること、つまり「自分らしい生き方の創造」ではないかと思うようになったのです。

現代人は感動することが少ないといわれます。確かに、本やテレビ、映画などのメディアを通じて小さな感動を感じることはあっても、こころを揺さぶられるような大きな感動は少ないのかもしれません。

幼い子どもは毎日が感動である、とある書物で読んだことがあります。道端の小さな花、虫の鳴き声、空を飛ぶ鳥……、些細な気づきに幼い子どもたちは感動します。その感動のほとんどは、「いのち」の喜びなのでしょう。

しかし、年齢を重ねるにつれて感動しなくなるのはなぜでしょうか。それは生きていること、すなわち「いのち」を意識しなくなってきたこととつながるように思います。

今年度も多彩なゲストをお招きしました。それぞれの分野は違っても、「いのちの現場」に関わっている方々のお話の中に、自分らしく生きるためのヒントを数多くいただいたように感じました。



新しい教育の形を

今年度の前半3回は「子ども」「教育」をテーマに開催。

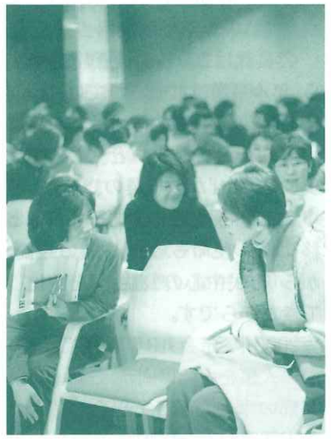
近年、学級崩壊やいじめなど、子どもの問題がいろいろ騒がれています。その原因は、生きる意味や目的を見いだせなくなっているからではないでしょうか。中でも、なぜ学校に通うのか、なぜ勉強をするのかということに、意義を感じにくくなっているようです。

いま、子どもの問題でクローズアップされているのが虐待。その現場に長年関わってきた横湯園子さんからは、実際の相談事例をもとにお話いただきました。自分を傷つけることでしか生を実感できない子ども、自分自身も傷つきながらどうしようもなく子を虐待してしまう親。そんな事例の中に、他人の存在を丸ごと受け入れ、共に生きていくことが難しくなっている「今の時代」を感じました。

そして、6・10月の2つの共催企画は、これからの教育のあり方を模索するもの。

競争社会の一員に子どもを育てようとしてきた従来の教育に対し、「他の生き物や自然との関わりの中で自らを表現し、すべてのものとつながり合いながら全体として一つの織物を成すことが“生きる”ということであり、そのプロセスすべてに“学び”がある」との考えに立ったホリスティック教育の実践は、とても興味深く、また、分科会での実践者からの報告は、新しい教育の息吹を感じました。

さらに、「お寺をもうひとつの学びの場に」をテーマに開催された10月の寺子屋トークは、全国青少年教化協議会との共催。都市化された街で、子どもたちの生活の場が家庭と学校だけになりつつある今、教育の場としてのお寺の可能性が論じられました。



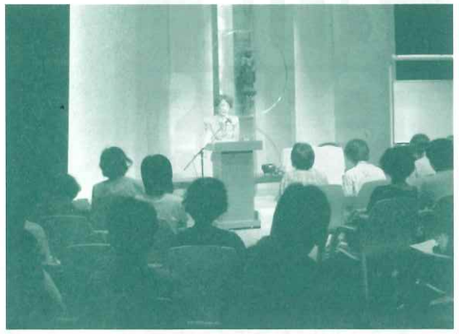
自分らしい生き方を問う

子どもの問題は取りも直さず大人である私たちの問題で、大人もまた人生の目的を見い出しにくくなっているのでは？　との問題意識から、後半3回は「自分らしい生き方」のヒントを考える企画を開催。

11月の「お墓の行方、大論争!」では、死に方の自己決定について活発な議論が交わされました。「自分の死に方を決めるということは、生きている“いま”を問い直すこと。そしてそれは、家族や親戚との人間関係はもちろん、自分のこれからの生きる姿勢を決めることにもなるのです」との森綾子さんの発言に、深く考えさせられました。

12月の「21世紀法要」では初の実行委員会形式を取り入れ、作家の辺見庸さんを招き、5時間以上のトークを展開。そこで投げかけられたものは、「個」としていかに自立するのか、ということであり、実行委員を含め、自分の生きる場所や仲間探しをしている若い世代は、多くの宿題を持ち帰ったのではないでしょうか。

そして2月の寺子屋トーク。様々な形でまちづくりの運動が活発になってきていますが、当日は、芸術文化を通してのまちづくりを語り合いました。地域性の復活は、私たちの生きる場所の復活でもあります。



芸術文化を通してのまちづくりは、これからの寺町倶楽部の大きなテーマとなっていくでしょう。

●

「自分自身の生き方を見つめ直す機会となりました」。今年度の来場者のアンケートの多くに、そんな言葉がつづられていました。

すでに新年度の企画も決まりつつある寺子屋トーク。6月には大阪大学の鷲田清一さんと関西大学の植島啓司さん、9月は精神科医の斎藤環さん、10月は医師の鎌田實さんなどなど、豪華な顔ぶれです。

これからも、「いのち」のふれあう場であり続けるとともに、参加された一人ひとりの気づき、そして出会いを大切にしていきたいと思います。

’00年度 寺子屋トーク開催記録

◆2000年
6月 「学び=つなぐ力」
日本YWCA幹事　金香百合
参加者88名
7月 「虐待 暴力がこどもの心に与える影響」
中央大学教授　横湯園子
参加者55名
10月「もうひとつの“学びの場”を創る」
大阪女子大学助教授　吉田敦彦
東京シューレ代表　奥地圭子
関西NGO協議会事務局長
榛木恵子
参加者39名
11月「お墓の行方、大論争!」
葬送ジャーナリスト　碑文谷創
宝塚NPOセンター事務局長　森　綾子
佛教大学助教授　村岡　潔
参加者46名
12月「21世紀法要」
作家　辺見　庸
参加者105名
◆2001年
2月 「新世紀・アーツ解体新書」
立命館大学教授　遠藤保子
NPO法人「アーツワークス」理事　小暮宣雄
参加者21名
累計354名

CLUB TOPICS

新しい一歩のために
～理事会報告～

應典院寺町倶楽部がスタートして、もうすぐ満4年。寺子屋トークやコモンズフェスタ、舞台芸術際などの自主事業を次々と打ち出す一方、多くのNPOやアーティストとの協働など、その活動の体系も次第に成熟しつつあります。

現在、倶楽部の理事会では5年目を迎えるにあたり、大幅な組織と運営のリニューアルを協議中です。

いま倶楽部に求められる真の役割は何なのか――これまでに理事会で話し合われた内容を要約して、今後の展望を考えます。

（文責＝編集部）

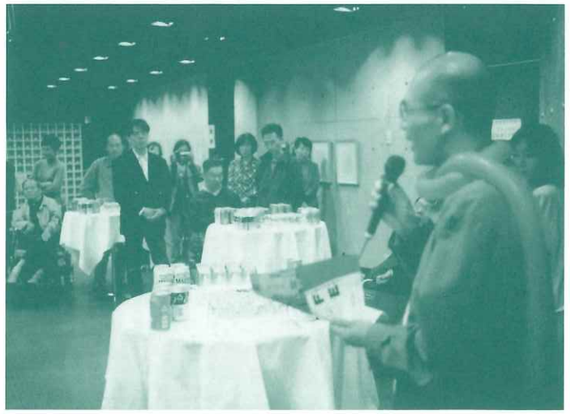
会員参加・交流を願って

應典院寺町倶楽部（以下倶楽部と略）は、應典院の再建直後の97年5月に発会、初代理事長に田村精造さん、事務局長に西島宏さんを選出、9名の理事体制でスタート。

当初は「会員どうしが交流したり、学び合ったりする共益的な組織」として出発、最大349名もの会員を記録し（98年4月）、一人ひとりが主人公となれる「参加型」の活動をめざしました。また、会員だけが対象の活動にならないよう、たえず場を開き、参加の幅を広くすることにも腐心してきたつもりです。その後、会員数は次第に減少するも、倶楽部の認知度が高まるにつれて事業への参加者は増加していき、99年度に開催した第18回寺子屋トーク「ノストラダムスをぶっ飛ばせ！」では、過去最高の209名が集いました。

すでに新しい倶楽部経営を模索しつつあった事務局では、98年5月に池野亮を二代目の事務局長に選出、前述の3つ（寺子屋トーク・コモンズフェスタ・舞台芸術祭）をコア事業と位置づけ、他に市民活動サポート事業、交流事業、広報事業などで事業構成を行う、現在の基盤固めに取り組みました。

99年度総会では、「会員どうしの交流」「会員の参加率アップ」などが話し合われましたが、確たる成果もないまま、会員数は200名を切るジリ貧状態となったのです。



「共益」から「公益」へ

98年暮れに、大阪市主催の「大阪まちなみ賞」を應典院として受賞、すでに当時から行政やNPOとの協働も進んでおり、多くのメディアの報道や秋田住職の講演活動などを通じて、外部からは活動の独自性に高い評価を得るようになりました。倶楽部の活動が誰にも開かれた「公益性」の高いものである証左だといえるでしょう。



会員数は200名前後と一定ながら、年々事業は拡張されていく傾向にあって、会員の位置付けも次第に「参加」から「支援」へと変わってきました。なぜなら事業の総体が、理事会と事務局が推進するものへと移り、その使命も「会員中心の共益」から「市民中心の公益」へと変化してきたからです。

2000年、発会丸3年を経て、理事会の人事を大幅に刷新。これまで倶楽部の事業を通じて出会いのあった実践家が新たに加わり、その中のひとり、関西のNGO界の第一人者である榛木恵子さんが、副理事長に就任されました。新理事会のメンバーは12名。自身がNPOを主宰したり、研究や事業の対象にしている精通者が多く、新生・倶楽部の頼もしい出発となったのです。

新理事会の改革4つの柱

新しい理事会が結成されて間もなく、今後を後進に譲りたい、と発会以来理事長職にあった田村精造さんが昨年秋に辞任、理事会で理事長代行として榛木さんを選出。発足時から長く理事長としてご貢献をいただきました田村精造さんには、紙上を借りて厚くお礼を申し上げます。

新理事会では、「市民中心の公益」を使命とする倶楽部として生まれ変わるべく、すでに具体的な会議が7回持たれ、今後の倶楽部の活性化に向け、以下の点について議論がなされました。

1）会則改訂

内実に応じた会則の見直しが必要です。すでに改訂の文案検討の段階となっており、とくに目的や活動、組織などが大幅に改訂される予定です。

2）お寺と倶楽部の関係強化

應典院と倶楽部が矛盾のない連携を強化していくことが、経営的にも最重要です。会則にもそれをうたいながら、お寺との関係の明確な位置付けを行います。

3）理事会と事務局の連携強化

理事が具体的なタスクを担い、事務局と連携しながら、いわば担当プロデューサーとして事業に参画します。

4）新しい役員組織

上記の改組に相応する役員組織、人事刷新、新しい役職の設置など検討中です。

社会に開き、つながる場所

「21世紀を迎え、倶楽部の課題はあらゆる面での基盤の確立でしょう。いいまでの実績を、より深めていくための体制づくりが急務です」と理事長代行の榛木さん。

NPOの原動力である事務局体制をどのように整えるかが当面の大きな課題のひとつであり、いずれ専従職員の雇用という問題も出てくるでしょう。お寺がしっかり基盤を支えて経営の安定を図りつつ、運営面では市民主体のNPOとして自立できるよう、ますますの改善・改良を重ねていきたいものです。

真の市民社会はNPOだけで実現できるものではありません。行政や企業の大きな力ともつながりながら、それぞれの対話と協調の中から育てていくもの。NPOやアートをよりいっそう社会に開き、つなぐ機能が、ますます必要とされることでしょう。



人が出会い、つながる場所。そこから社会に向けて、私たちの暮らしや生き方を変革する力を育むこと。應典院寺町倶楽部が、私たちの街に新しい風を吹き込む存在となれるよう、今後いっそう努力していきたいと思います。皆さまのご支援・ご協力を、よろしくお願い申し上げます。

新世紀・アーツ解体新書～第27回寺子屋トーク

当日は21人が集まり、パネリストに遠藤保子さん（立命館大学教授）と、小暮宣雄さん（NPO法人「アーツワークス」理事）を迎えて開かれた。サブタイトルは「芸術文化はまちを育てられるか」。コモンズフェスタのビデオ紹介に始まり、参加者がアートのどの部分（演劇、地域・まちづくりなど）に関心があるのか、また、まちづくりという視点からアートをどう捉えるべきなのか、などについて意見交換が行われた。

パネリストからは、アートを発表する場のあり方に関する意見、とくに「今後は金銭価値から離れたところに主軸を置くべきである」との意見が出された。また、「場を提供する側の発想を手がかりに活動することで、まちと芸術家が互いに育ち合ったり、アートをより身近に感じることができるのでは」という意見も出され、芸術家と観客の相互努力の必要性を訴える意見が、全体を占めるような印象を受けた。

ただ、参加者のほとんどが“演劇とアート”に関心があったことを考えると、演劇の現場からの声が少なかったことは残念だ。

應典院も、文化施設という「場」として、必要とされるものを必要とする人に提供できているのかをチェックし続けることで、今後もよりいっそう成長していけるように感じた。

（文責：後藤　史）



EVENT REPORT

舞台芸術祭が終了

第3回舞台芸術祭は1月27日から開催、約1ヶ月の会期中6公演1000名を超える来場者を集めました。今年は演劇公演のほか、子ども演劇ワークショップやシンポジウム、さらにはアート展とライブなど、子どもから大人までが、舞台芸術にふれる機会となりました.

多彩な公演が展開

オープニングはテレスコピックの「混沌とことんでドン」。日常の動きを鋭く捉え、それをダンスで表現することで幻想的な世界へと導きだす独特の演出が好評でした。

続く2月2日からは、劇団メロディアスメロン「世界は、よかった」の公演。應典院で旗揚げ、稽古場にも利用するなど、應典院とは非常に近しい関係の劇団です。

2月6日には寺子屋トーク「新世紀・アーツ解体新書」のセッション。アーツワークス理事の小暮宣雄さんと立命館大学教授の遠藤保子さんを招き、舞台製作だけでなく、理論を基盤にこれからのアーツを切り開こうという試みでした。

2月10日からの「子ども演劇ワークショップ」は、小学生4名が3日間かけてひとつの演劇を作り上げるというもの。最終日には、「冒険」をテーマにした作品を披露、子どもならではの発想が愉快でした。

2月17日には、児童演劇で有名な劇団風の子九州の「ぴーかぶー」を上演、幼児とその親たち40名が鑑賞しました。

煩悩のアート展にびっくり!

ファイナルは2月19日から始まった「百八シアター」。造形作家の関本徹生さんが、マネキン人形を題材に作った「煩悩の108体」。本堂に所狭しと飾られたマネキン人形が取り巻く中、2月20日から連日ミュージシャンが来場してライブも開催、サックス奏者として有名な坂田明さんのサウンドが鳴り響きました。

演劇とは舞台芸術であると同時に、地域の人間関係を再生する糸口でもあります。倶楽部のメイン事業として、これからも様々な取り組みに挑んでいきたいと思います。

Make up Community

コミュニティな人々

ゲスト:今岡由樹さん

今回からコーナーを一新し、應典院&寺町倶楽部にご縁のある方々を紹介します。リニューアル第一弾でご登場願ったのは、大阪市立夕陽丘中学校教頭・今岡由樹さん。今岡さんは平成11年度、41歳という若さで教頭に就任。「『教頭』のイメージを変えたい」と、いまなおパワフルな取り組みをされています。なかでも昨年秋に実施した就労体験は、地域と学校の連携を推進する画期的な取り組みでした。應典院も受入機関の一つでしたが、寺町倶楽部を含め、今後ますます接点が増えてくることでしょう。

貴重な機会を与えてくださった今岡さんの、熱い思いを伺いました。



僕が教師になったのは、子どもの頃に見たテレビ番組『飛び出せ青春!』の影響が大きいんです。「こんな教師になりたい!」って強烈に思ってね。でも実際は順風満帆なんてことはまったくなく、高校受験のときも公立に楽勝で受かると思っていたのに見事失敗。「俺は絶対に大丈夫」と公言していた自分が情けなくて、私立高校に入学したあと、再受験して公立に入り直しました。

27歳のとき、ようやく中学の教員採用試験に合格。最初の赴任校は当時とても荒れていて、新学期早々、生徒からトイレに呼び出され、血みどろの殴り合いをしたこともあります。でも本気でやり合ったことで、生徒たちは「こいつは一筋縄ではいかん」と思ったんでしょう。少しずつ僕の話に耳を傾けるようになりました。

僕は子どもと関わるとき、見えないところで平伏させるような「威厳」が必要だと思ってるんです。それは「威圧的」ということではなく、子どもたちが自然と「この人から学びたい」と思うような、「人生の先輩としての存在感」とでもいうものです。子どもにベンチャラはいりません。子どもは大人の下心を見抜く鋭さをもっているので、つねに真剣さが問われているんです。

教頭になる前はずっと、サッカー部の顧問をしたり、体育教師として体育祭でマスゲームを取り入れたりして、「あきらめないこと」「仲間と成功を味わうことの喜び」などを伝えてきました。若さゆえのパワーでやってこれた分、「先生はヤンチャな子としか話さない」と厳しい意見をもらったこともありました。自分が完璧ではないからこそ、いろんな個性や価値観をもった人々に関わってもらう必要性があることを感じています。

今後も應典院などの地域資源を活用しながら、家庭や地域との連携を深め、豊かな心をもったさわやかな生徒の育成と、地域に開かれたよりよい学校づくりをめざしていきたいですね。

秋田住職発

應典院掲示板

春爛漫。大蓮寺の桜もいまが盛りと咲き誇っています。「満開の桜の木の下には、数々の骸が眠っている」とは梶井基次郎の有名な一節ですが、桜はいつも私たちにいのちの尊さ、切なさを懸命に指し示してくれているようです。

もしあなたが最期の病室にあって、人生の終わりにただ一度だけの外出を許されたとしたら、季節を問わなければ、満開の桜の木の下を歩きたいという人は多いのではないでしょうか。それほど桜は、短い人生を投影するかのように儚く美しく、一種の諦観、諦めの美学にあふれています。どうにもならない悲しみと、この諦念の心は一対のものになっていて、そこに昔の人はしばしば仏や極楽という「お任せ」の世界を見出したのではないでしょうか。

「諦めずにがんばれ」の現代、日本人は諦念の真理を忘れ、歩むほど遠ざかるゴールを幻想しながら、消費やIT、あるいは新戦後史観というようなものにすがろうとしているのかもしれません。桜のセンチメントが、もういいんだよ、と教えてくれているというのに。

■市民の学びと社会参加を考える

去る3月26日、大阪市社会教育主事会の有志と関西こども文化協会、應典院が共催して「市民の社会参加の実現に向けて」を開催、現役の社教主事、教育系のNPOスタッフ、学生ら43名が集まり、熱心な協議が行われました。

社教主事とは、大阪市教育委員会に所属して、生涯学習の推進を担う専門家。地域の人権センターや学習センター、区役所などに勤務して、市民の学びをリードしています。

もちろん学びの最前線にあって、



いまはNPOの勢力も無視できない時代。最近は自治体によって、NPOといっそう協調路線を強めるところもあり、今後その協働を目指して互いに学びあおうと、「NPOと社会教育・生涯学習行政とのパートナーシップ研究会」が発足する運びとなりました。学びの多様化の時代、いよいよ應典院の活動も真価を問われる時代となりそうです。

■青年センターと初の協同事業を

同じく行政との協働事業をもうひとつ。去る3月4日、市立中央青年センター主催の「青年芸術文化劇場」が開催され、應典院を拠点とする若手劇団メロディアスメロンが最新作「世界はよかった。」を上演しました。この舞台、青年センターから應典院に委託された事業で、先行で実施されたシンポジウムや試演会も含め、企画から製作、広報まですべて應典院が担当して進めたもの。もちろん、青年センターから受託料をいただいての「お仕事」で、應典院の演劇づくりの実績が行政からも評価されたことになります。

なお6月23日には「演劇による街づくり」と題して、秋田住職のレクチャーとメロディアスメロンの桂正樹さんのワークショップが、クレオ大阪南(大阪市市民局)で開催、いよいよアウトリーチ(社会化)活動が活発になってきました。

■21世紀の宗教を語るシンポ

21世紀を迎え、日本の宗教の役割を考える大規模なシンポジウムが、来る4月23日に開催、高名な脳学者である養老孟司さんや作家の井沢元彦さん、国学院大教授の石井研士さんに混じって、秋田住職もパネラーとして参加、宗教不信や宗教忌避の現象をどう打開するか、を宗教者を代表してコメントします。

当日は10:30～17:00、グランキューブ大阪で。無料ですが招待状が必要です。電話06-6443-7179まで。当日の模様は、書籍としてまとめられ市販される予定。

スタッフ研修で信州・神宮寺を訪ねる。

去る3月31日、4月1日の両日、應典院のスタッフ4名他が信州・松本市の神宮寺を研修で訪れました。神宮寺は名物住職・高橋卓志さんの名前とともに、全国に知られた「開かれたお寺」。市民向けの講座「尋常浅間学校」をはじめ、タイのNGO支援やホスピスケアなど幅広い活動は、行動する仏教の模範として大いに注目されるところです。

当日は全国青少年教化協議会の神仁課長他も同席して、高橋さんご夫妻を囲み、熱心にその活動を拝聴。ご当地浅間温泉の名湯で、平生の疲れを癒しました。

帰路は地域通貨で知られる滋賀県・草津コミュニティ支援センターを訪ね、ヒアリングを行うなど、盛りだくさんの内容。往復13時間の車移動も、ご苦労さまでした。

(写真中央が高橋さん)

